

『京童』挿絵小考(その一)

—— 卷一「誓願寺」と「和泉式部」 ——

古 田 雅 憲

【はじめに】

『京童』六卷六冊⁽¹⁾が京都名所案内記の嚆矢(二六五八・明暦四年刊)という特徴からさまざまな研究に利用されてきたというまでもないことだが、ではそれじたいを主たる考察の対象として取り扱ってきたかといえ、論者のよるな門外漢の耳にとつてということ⁽²⁾を割り引いても、あまり多くは聴かないように感じる。

同書は洛中洛外(一部、近江国を含む)八十七カ所について挿絵とともにその縁起・来歴を記すが、およそ趣味的に偏るその記述や統一感を欠く挿絵に触れるにつけても、後の本格的な案内記・地誌類と比べればちよつと用心したくなるような風を漂わせていることは容易に感じられるところで、そのあたりのことが同書を真正面から取りあげることの多くなかつた一因かとも想像したりする。たとえば『日本古典文学大辞典』項目記事にいうような、「戯文調で綴るところは特に考証をへたものでなく、訛伝俗説を選

ばず、一々に添える絵も写実的ではない」との表現や、『日本名所風俗図会七／京都の巻I』解説にいうような、「その内容は一貫した体系的な編集方針に欠けるところがあるが、一般向きの読み物とした名所記としては最初であり、その後の趣味的地誌の先駆けとなった点は大きい」との表現は、そのあたりの気分を表してもいるのだろう。

ただ『日本名所風俗図会』解説が別に述べるような、「堅苦しい官撰地誌と違って文学的趣味に富むところがあり、特に挿し絵を主として読者の眼をよろこばし、神仏の縁起・口碑伝説等の興味的記事を述べ、文中いたるところに和歌・俳句・狂歌等をおり込み、趣味的読み物として、仮名草子とともに一般読書子の歓迎を受けるに至つた」との面を強く意識してみたいと思う。もとより『京童』全体を論ずる力はないけれども、いま挿絵のいくつかについて思いつきをまとめ、絵画資料として見た興味⁽³⁾の一端を述べてみたいと思うのである。確かに『京童』挿絵は後の地誌

類の絵図に比べて写実的でないが、さればこそさまざまな含意をそこに表しうるのだろうし、その情報は本文の記述と併せてそれぞれの場所の雰囲気をつかひ上げらせうるだろう。

◇

◇

『京童』書誌については『近世文学資料類従』などに詳しい。作者はのちに芸州浅野家に仕えた医師中川喜雲、俳諧や仮名草子をもよくしたという。画者は野々口立圃説、吉田半兵衛説などあるが、その署名はなく、いまのところ不詳とすべきかという。近世も早くになったこととして、『京童』においても作者と画者の分業が明確であったとは見なしがたく、また文章の表現を主とする仮名草子の一書ということを考えれば、作者喜雲の自画ではなく絵師某の手になるにせよ、彼の趣向が相当に強く反映する挿絵であるとは考えてよいだろう。後に具体的に述べるところだが、『京童』において本文記述と挿絵表現とが付かず離れず微妙な関わり方をしているように思われることも、挿絵に作者の趣向が反映するのなら得心のいくところではある。

『京童』挿絵は、本文記述との関わり合いのなかに各所に関わる情報を語らせるべく、いくつかの趣向が凝らされていると見たい。いったい仮名草子において挿絵は二次的な表現であるにせよ、それは挿絵の過小評価を意味しない。『京童』挿絵は本文と付かず離れずそれを補完する情報を

含んでいるのではないか。当時の読者たちが了解したように、いまその挿絵を読んでみようとする由縁である。

詳しくは以下に触れるが、『京童』挿絵には参詣曼陀羅類に見えるような表現の断片を見出すことができる。それは近世も比較的早くに成った名所案内図会類のいくつかにも共通するが、あるいは『京童』など近世ははじめころの名所案内図会類は、中世以来の「絵語り」の文化とどこかで接点を持っているのかも知れない。実は、『京童』を、中世以来の「絵語り・物語り」系譜の、その直系ではむろんないにせよ、外縁あたりには位置づけることもできるのかもしれないと論者は目論んでいるのである。

【塔の図像】

かつて塔上の装具「流星」の語誌を述べたことがある。その調査のなかではいくつかの地誌類も参照した。名所案内図会類の挿絵と記述とのうちに堂塔の描写を求めようとしたわけであるが、そのときに塔の図像表現について気になることがあった。

たとえば『都名所図会』⁵⁾巻三「八坂法観寺」図〔図①参照〕や「妙顕寺」図のうちに塔を見ることができ、そこに屹立する塔の姿は、およそ軸測投象に従って構図された全景の内になったく違和感を漂わせることなく造形されているといつてよい。その意味では一貫した写実に破綻は



図①

ない。たとえ線遠近法による写実に馴れきった現代人が見てさえもほとんど抵抗を感じないであろうと思う。同書に描かれる塔は、大小の違いこそあれ、すべて

そのような写実に従う。同書は一七八〇年の刊というが、今日いわゆる名所案内図会として広く知られるような、たとえば『拾遺都名所図会』（一七八七年刊、巻二「東漸寺」図など）、『都林泉名勝図会』（一七九九年刊、巻二末「靈山」図など）、『花洛名勝図会』（一八五九年刊、「靈山翠紅館」図など）などの挿絵において、それぞれの塔が同様の表現を得ているのを見ることができ。

ところが十七世紀までに成ったものうちに、たとえば『芦分船』とは一六七五年に刊行された大阪名所案内の一書であるが、その巻二には、明らかに異質の塔図像を見ることができ「図②参照」。やはり軸測投象に従って全景が構図されているのは同様なのであるが、その中で二基の塔だけが「視点」を異にして真正面から見たように描かれ、しかも塔の最下層だけは極端な線遠近を採って描かれているのである。塔ばかりがその「写実」からひとり離れ、明



図②

らかに周囲のものどもから決然と屹立しているさまである。塔だけがなにか異質の感覚に遵っていると受け取ることもできる。「塔のシンボリズム」といつても

よい。塔によって喚起されるなにかの感覚がこの構図中にリアルタイムで機能しているのか、あるいはかつて機能した名残りとしての「形式」のようなものなのか、そこは議論しなければならぬけれども、あきらかに先掲十八世紀の名所案内図会類の図像表現とは異質の点である。

同じ作者（一無軒道治）の手になるという『住吉相生物語』（一六七六年刊、巻一「神宮寺」図など）にも同様の表現が見えるが、さらにその類例を求めると、『堀川之水』（一六九四年刊、巻一「仁和寺」図など）、『河内鑑名所記』（一六七九年刊、巻二「天野山」図など）、『奈良名所八重桜』（一六七七年刊、巻十「食堂・観音塔」図など）、『出来齋京土産』（一六七七年刊、巻三「八坂塔」図など）、『洛陽名所集』（一六五八年刊、巻四「清水寺」図など）などの諸書に見出すことができる。このような「塔のシンボリズム」の図像表現はそれなりの広がりをもつというべきである。

そして『京童』（一六五八年刊）、およびその続編たる『京童跡追』（一六七七年刊、卷三「法華寺」図など）にもそれを見ることのできるのである。

『京童』では卷一「誓願寺」図〔図③参照〕、「八坂の塔」図〔図④参照〕、「子安の塔」図、卷二「神泉苑」図、卷三「真如堂」図、卷四「黒谷」図等のように塔図像はすべてそれであるが、そのような塔の描き方は中世のいわゆる参



図③



図④

詣曼陀羅類に多く見るところであつて、あるいは両者にはどこか接点がある、そのような繋がりを示唆する表現とは言えまいか。参詣曼陀羅類が「絵解き・絵語り」の文化に属するものであつてみれば、これらの名所案内図会類の挿絵もまたそのような世界とどこかで関連しているのではないかとの想像である。考えて

みれば「名所案内」とは、名だたる霊場や寺社仏閣の由来・縁起を絵図とともに語り伝えるという意味において「絵解き・絵語り」とおよそ近似の表現ではないか。名所案内図会の嚆矢という『京童』挿絵を「絵解き・絵語り」の系譜、その外縁あたりに置いてみようとの意はそこにある。

【本文の雅趣―「和泉式部」条】

『京童』卷一「和泉式部」条を取りあげる。中川喜雲の手になるその本文を示してその確認から始めたい。なお私に読点を補い、段落番号を加えた。以下の引用についても同様。

和泉式部／是なるはいづみしきぶの古墳なり。①此人は一条院のきさき上東門院の女 中なり。父は大江の雅致、母は越中のかみ保衡のむすめ。夫はいづみのかみ道貞なり。さるによりていつみ式部といふなり。小式部が母なり。②やまとうたの道、ひろくま なびよめることの葉あまたある中に。拾遺集第廿に性空上人のもとへよみてつかはし ける／くらきよりくらき道にそいりぬへきはるかにてらせ山の端の月／此作者いづみ 式部なり。中納言定家小倉の山荘の百の人かずにいれられ侍る。③まことにあらさ らんこのよの外のせつなる心さもあらんことほりに、今も袖をぬらし侍る。名はくち ぬな

らひにて。すゑのよにとどめ。からはつちにうづみぬれば。いかなるおもかげなりつるそよとなつかしく。いまたびのあふよしもかなと。をきあまる露は塚をうらむるなみだにこそ。／花をたてたむくる和泉しきみ哉
／和泉式部命日は十八日也。

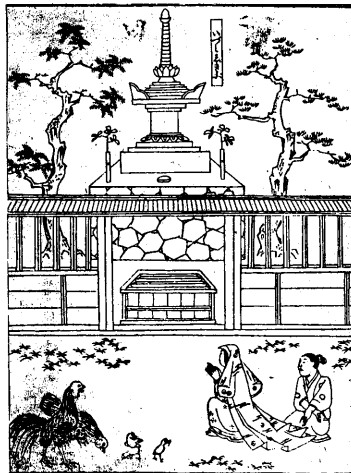
「和泉式部」条として取りあげられるのは、俗に言う和泉式部寺、いま中京区新京極に所在する華岳山誠心院とその境内墓地に所在する供養塔にまつわる物語である。全体に容易の文章である。

まず本文①に和泉式部の経歴が簡単に示されるが、その人についてよく知られるところであろう、特に云々すべきことはない。ついで本文②に、当代の趣味人、『京童』を読もうというような人ならば一度は耳にしたこともあろう「くらきより」の歌を引用し、その詠者として彼女の歌才を確認する。いうまでもなく、彼女が帥宮との関係の果てに書写山性空上人に結縁・救済を求めようと詠進したものであるが、そのような含意もおよそ了解されたであろう。それを承けて本文③に作者・喜雲の感慨が語られていくが、ここはれいの「あらざらん」のうたを踏まえながらの文脈と洒落ている。名のみ聴く式部の美貌にひとめ自らも接したかったが、しよせんすべてはかなわなむことといったところだろうが、そのような趣意は「くらきより」のうたに

も、また自作の俳諧にも響いているわけである。要するに、古の恋する美女とその苦惱、また決して彼女には逢うことのない男（作者であり読者でもあろう）の憧れと諦めとが、古歌を踏まえた端正な文体のうちに語られているのである。そのような優美、典雅への志向が『京童』本文の一つの特徴であるといつてよいのではないかと思う。

【図の含意―鳥あわせ】

さて絵図「図⑤参照」である。まず目を引くのは中央の



図⑤

塚である。本文には「古墳」としか触れられなかつたけれど、誠心院墓地境内に所在

する高さ約四メートルの、和泉式部供養塔である。鎌倉時代の銘を持つ重要美術品というが、その塔前に侍者を伴った衣かづきの女が描かれる、彼女は塔を礼拝している。先に『京童』画者某は中世の参詣曼陀羅図的な塔を描くと述

べたが、やはり中世絵巻のうち『一遍聖絵』・石清水八幡境内の景に、神社巫女に参詣して託宣を得ようとする衣かづきの女とその侍者を見ることができ、また兵庫光明福寺の景に、頭巾を被る老尼に従って参詣する衣かづきの女とその侍者を見ることができ、ひざまづく衣かづきの女は礼拝者の姿にいかにも相応しい。

画者某の描いたそのような挿絵表現に、作者喜雲のうた「花をたてたむくる和泉しきみ哉」が響いてくる。読者にしてみれば、石塔に花を手向けて礼拝する女に名のみ聴く和泉式部の面影を重ね、そして「いつ見し君かな」との歌のことばにひかれて、自らの憧れをもそこに重ね合わせることになる。ちよつとロマンチックな趣は「名所案内」として読者の心をじゅうぶんに惹きつける仕立てになつていよう。『京童』とは本文記述のことばと挿絵とのそのような関わり合いのなかに典雅な面白みを生起する。

ただし「和泉式部」図の表現はそのような典雅に止まらない。論者はこの挿絵の眼目を、画面左下に描かれている鶏鳥と雛の図像にこそあると見たい。それらは、ついでに書き加えられた埋草がわりで決してないし、実際にたまたまそこにいた家禽を写実したようなものでもない。画者某および作者喜雲、『京童』制作者たちにとつて名所「和泉式部」条を表現するうえで書いておかなければならない重要な象徴ではなかったか。

最初に示したように、『京童』絵図を参詣曼陀羅絵図などとの関わりの中に見ようという立場には、この鶏鳥と雛とを中世絵巻によく描かれる「鳥あわせ」の景物の一つとして連想することは容易である。たとえば「年中行事絵巻」巻三第二段「図⑥参照」に庶民の闘鶏を描いた場面がある。鳥居の内側の境



図⑥

内、神撰を供えた祠前で闘鶏を奉納興行するさまである。同景の右側、鳥居の外苑に雌鳥と雛が描き添えられているのを見ることができ、おそらく鳥あわせに使われる雄鳥の連れ、一緒に飼われているということであろうか。「和泉式部」図の鶏鳥と雛によく似た表現である。

そのような絵図を書き添えることで、この「和泉式部」という場所が「鳥あわせ」の行

われうる空間に近接する、あるいはその雰囲気の中に於いてそのような空間と共通した匂いを持つ、そのようなことを制作者たちは暗示しようとしていると見るわけである。

「匂い」ということをもう少し述べたい。「鳥あわせ」のような興行が奉納されるのは繁華の場であり、そこにはさまざまな人が集まるわけで、たとえば先の『年中行事絵巻』同場面にも、鼓を打ちながら神託を告げる老巫女の託宣所、その託宣を聴く若い女、従者とともに筵に坐る放浪巫女、頭上に曲物の器を載せる女、扇の骨の間からのぞき見する高貴らしい男、蓬髪者、僧侶、そしてさまざまのポーズをとる子どもたち、いちいち述べる暇のないほど実にはさまざまな人々がさまざまの姿態に描かれている。そのような場が信仰と芸能とが渾然一体となった空間であり、そのなかに、回国遊行して各地の宗教的口碑を伝えた人々の姿をも認めるといったような理解のしかたはもはや周知に属しよう。「和泉式部」図に書き添えられた鶏鳥と雛の姿は、その場所が漂わせているそのような「匂い」を象徴的に表現すると見たいのである。『京童』作者・画者は「和泉式部」という土地にそのような「匂い」を嗅ぎ取っていたのではないか、その「匂い」をこそ表現しようとしていたのではないかといっているのである。

ことは「和泉式部説話」に関わっている。『洛陽誓願寺縁起』や『和泉式部縁起』にいう書写山參詣説話は本文②

からも連想されるところであるし、あるいは御伽草子『和泉式部』にいうような、道命阿闍梨との母子相姦という深刻な恋の闇にまつわる伝承が、制作者たちの嗅ぎ取っていた「匂い」であったか知れない。いづれにしてもその顛末を語り伝えたのが回国遊行の放浪巫女たちであった点に留意したい。各地に和泉式部にまつわる遺物が伝わるのをその証左ともいう。また誠心院供養塔の、塔身背後の基礎部分には正和二年（一三一三）の銘とともに発願者十余人の僧尼の名がみえ、それもこの塔の建立が鎌倉期に盛行した念仏信仰によることを思わせるという。ちなみに『北野天神絵巻』に僧形、被頭巾の回国聖とおぼしき男と、それに同道する放浪巫女の衣かづき姿が描かれている。あるいは「和泉式部」図に塔を礼拝する女とはその末裔かと思いたくもなるが、それは穿ちが過ぎるといえるものか。

ともあれ「和泉式部」図は、この名所に回国遊行者の影と彼らの語った恋の闇にまつわる伝奇の匂いが立ちこめていることをほのめかしているのではないか。それであればここが「和泉式部」条の眼目である。絵図で巷間俗説の伝奇をほのめかしながら、本文では古典和歌を踏まえながらあくまで典雅に止まって逸脱を避ける、そのような雅俗の微妙な緊張の内に「和泉式部」条の価値は認められなければならぬのではないかと思う。名所を単なる物見遊山のものとして平板化しない、そこに重層的な物語の積み重ね

を見て取り、それを文章と挿絵とで表現するという、そのような美学が『京童』作者・画者の依つて立つところではなかつたか。なるほど後の本格的地誌に比しては趣味的に偏するといえようが、そのような個人的趣味的のうちにこそ、各地の聖なる縁起の物語はまだしもその聖性の命脈を保つていたと見ることができよう。『京童』制作者たちにとって「名所」は単なる物見遊山の対象ではない、古代・中世以来の時間的積み重ねを踏まえた、重層的な聖なる空間なのである。

【本文の雅趣―「誓願寺」条】

『京童』は「和泉式部」の前条に「誓願寺」を取りあげている。誠心院はもともと道長が式部に与えた東北院内の一庵に由来するというが、後に小川の誓願寺隣に再建され、さらに中世末には誓願寺とともに現在地に移つたというから、両者の関連はきわめて深い。それはまた『洛陽誓願寺縁起』が和泉式部伝説を伝えていたり、謡曲『誓願寺』に和泉式部の霊が一遍に六字名号を乞うたと語られたりすることと無縁でない。「誓願寺」条に寺内のありさまを述べて「六字名号の額は一遍上人あそばされ給ふなり」というとおりである。

さて『京童』巻一「誓願寺」条の本文について確認しておきたい。記事はまず同寺の縁について述べ、もと天智帝

の発願によつて南都に建立されたこと、桓武帝のとき小川の地に移築されたこと、また聚楽第建設に際して現在地に移つたことなどが、本尊阿弥陀仏の縁起とともに示される。ついで寺内のさまを述べて次のようにいう。

六字名号の額は一遍上人あそばされ給ふなり。今も遊行上人くわいこくの時、此御寺に一七日ましますなり。再興大施主の額は大きくじくうしん親王ずいあんの御筆なり。さて又堂の南のかたの塔の本尊は薬師如来なり。鎮守は春日大明神なり。

一遍の名とともに「今も遊行上人回国の時、此御寺に一七日まします」と見えることに留意したい。先に「和泉式部」図のうちに和泉式部伝説や放浪巫女といった回国遊行の匂いを読みとろうとしたわけだが、実は、読者をその方向へ導くこととなる一文が前条に織り込まれているのである。読者は「誓願寺」条から「和泉式部」条へと読み進んでそれらの絵図と本文とをじっくりと思い併せたとき、これらの場所のたたずまい、匂いをパズルを解くようにすつと了解させられてしまうわけである。

本文は末に寺内の銘木「未開紅」について触れ、それを見に近隣都鄙から多くの人が集い、詩歌遊びの催されることを記して結ばれる。要するに、誓願寺という名所につい

て、その縁の高貴が詩歌の題ともなる寺内銘木とともに語られていくという構成を採っているわけで、およそ典雅の趣を旨とする記述であるといえよう。本文はあくまでも逸脱を避けて雅にとの、作者・画者の美学は保たれる。末尾に付される、当寺は清少納言の忘れられた墓所ともいうとの記述は、いつそうその趣を増すことになるだろう。

【図の含意―「撞木杖」】

そのうえで「誓願寺」図〔図③参照〕がどのような俗を語りうるのか考えてみたい。

まず画面左下に銘木「未開紅」が描かれているのが見える。本文に、この花の色は蕾のうちこそ濃い紅に美しいといふのだと記しながら、図にはや散りはじめた躰として描かれる。それというのも、作者のうた「折からちりすぎたるけしきかがみそなはしたまはんやといへば／紅梅を紫雲やうはふ寺の庭」に響いているからである。読者をそのように得心させようというわけである。

が、なんといつても画面中央の二人の人物に読者の視線は自ずから定まるであろう。彼らの背後、画面右には「塔のシンボリスム」も見える。この二人、頬に刻まれた深い皺から翁と媼であることはすぐに分かるし、兩人とも左手には数珠を持っているから誓願寺参詣の景であることは確かである。作者喜雲は本文に彼らについて何も語らない。

彼らの何者であるか、画者某の描こうとするところが読みとれるならば「誓願寺」条の理解も深まるであろう。

その契機として論者は老翁の杖に注目している。媼の杖が単純な棒状であるのに対して、翁のそれはわざわざ握り方もかえて描かれ、明らかに異なる表現が与えてある。その握りの丁字状からそれが鹿杖・撞木杖であることが知られるであろう。このような細かな描写にはやはり意図がある。

もつとも中世の絵巻類にそのような老人の図像は決して珍しいものではない。たとえば『石山寺縁起』巻五〔図⑦



図⑦

参照〕に、大鯉の腹から院宣の見出されたのを囲み見る宇治橋付近の庶民たちを描くが、そのなかに撞木杖について見物する老翁の姿が見える。そのような老翁はほかにも見えるが、ほとんど頭巾然とした妻烏帽子を被っている点など、とりわけ彼は「誓願寺」図の翁によく似ている。が、やはり「誓願寺」図の翁の服装全体の立派さ、品格のようなものはこれらの老翁に感じられ

ず、また媪と対になっていることを考え併せるにつけても、やはり「誓願寺」図の翁媪はなにかしらの象徴であると見たい。



さて「京童」絵図に杖はあまた描かれているが、この翁の持つような撞木杖は「誓願寺」図を含めて四図にしか見られない。そのうちもつとも印象的なのは巻一「靈山」図「図⑧参照」における表現である。僧侶が撞木杖とそれを



図⑧

鼻緒に通した足駄を恭しげに捧げ持ち、それを参詣者は頭を垂れて礼拝している景が描かれている。「靈山」

本文には国阿

上人の伊勢神宮参詣の靈奇譚なども述べられるが、足駄と撞木杖とは遊行者国阿上人の用いた物にして彼の靈験を象徴するのである。周知のように、国阿は十四世紀の人、遊行七代託阿に従って時衆となり回国遊行した人物であり、東山靈山寺は光英から国阿に譲られて彼が時衆道場として主宰した地である。「靈山」図において撞木杖は、その本

山において祀られるに相應しい、回国遊行者の靈力の象徴なのである。

ほかに巻二「御影堂」図「図⑨参照」、「新玉津島」図に撞木杖が見える。「御影堂」図で撞木杖（あるいは片撞木か）



図⑨

をもつのは帯刀者に従う侍者（やはり帯刀）のようである。本文に同寺に一廻上人の御影あること（もつとも）ここが遊行

の末寺ではないと断っているが）を述べて「ほんなうといふもぼだいなり、さとるうへにはさとりあり、まよへるうへにはまよひあり、もとより無一物、うたふもまふも法の声、をれる扇のひやうしをととりて、うたはばうたへまはばまへ」と戯れるのであつてみれば、やはりここも雑遊芸の風を漂わせているとみたい。図右上には扇屋が描かれて本文と響きあっているのであれば、行人の手に握られる撞木杖にも同様の含意を与えられていると見て不自然でない。

「新玉津島」図でも撞木杖を持つのは侍者である。当代すでに商家の裏に紛れてしまった同社を尋ね、当商家の門

をたたく帯刀者の後ろに杖を持つ侍者が控えている。玉津島明神は和歌の道の守りであるから、これじたいは雅世界に属する、いわゆる雑遊芸とは一線を画する場所である。本文も「御影堂」本文の諧謔味とは異なつて品格を伴う。

が、御影堂、新玉津島ともあの悲田寺に隣接していることを思い出したい。たとえば上杉本『洛中洛外図屏風』右隻には、玉津島社の丹の小祠と礼拝者を見ることができ、その下方に御影堂の屋根も見える。そしてそれらの直ぐ左隣に悲田寺の堂々たる結構が描かれるが、その門前に、ひとときわ華やかに念仏風流の輪が練り広げられているのである。古代・中世以来の悲田院の機能は周知のとおりであるが、この一帯の雑遊芸の匂いは実は濃厚である。そうであつてみれば、「新玉津島」図に撞木杖が見えるのも、やはり「御影堂」図と同様に、「靈山」図の明確に示すような回國遊行とか雑遊芸とかの風を連想させる象徴として機能していると見てよいのではないかと思う。玉津島社じたいは和歌の守護として雅世界に属しはしても、すでに商家裏に紛れてしまつていたそこを、遊芸者を気取つてそのあたりに至つた主従二人がその体裁のまま訪ねる、画者某はそのような趣向をそこに表したと想像したりもする。

【翁媪ペアの含意】

撞木杖は險路の実用品であるし、また老人の持ち物とし

ても多く描かれているようである。「誓願寺」図でそれを持つているのが翁であつてみれば不自然なことではまったくないが、「京董」においてはやはり「靈山」「御影堂」「新玉津島」各図の撞木杖の示すらしい象徴性を思うにつけて、こればかり「写実」に過ぎないとは思ひにくい。

◇

◇

翁媪二人の服装は旅装ではない、そう遠くないところからの参詣とみえるし、また境内は平地である。そのような場合にさえ杖を必要とするとは、むしろ老人なのだからといつてしまえばそれまでだが、これまでに触れた撞木杖の象徴性に鑑みて、論者はこの両人が盲目なのではないかと疑いたのである。

『七十一番職人歌合』（十五世紀末）¹⁰は廿五番として「琵琶法師」と「女めくら」（鼓を打ちながら歌う姿）とを対として記すが、そのような感覚に類する表現なのではないかと思う。ちなみに上杉本『洛中洛外図屏風』左隻、小川通り水落地蔵門前の歳末の景内に、犬に追われる琵琶法師が描かれるが、一緒に逃げまどう侍者と見える男も右手に撞木杖を持っている。

当代の法制「当道式目」に照らしては、盲人にして撞木杖の所持が許されるのは別当、檢校の高位者だけであるから、彼らは檢校とその老妻ということになる。檢校は撞木杖のほか檢校頭巾、檢校服など特別の装いを許されたとい

うが、『人倫訓蒙図彙』や『近世職人尽絵詞』にその容姿が描かれている。吉川弘文館『国史大辞典』などでも簡便にそれらの図を見ることができ、後者では被頭巾、紫衣紫素絹白袴の装束に撞木杖を突く検校の姿が描かれて、それは「誓願寺」図の翁とも被り物を除いては近似している。また前者には琵琶を傍らに置いて弟子の挨拶を受ける座姿が描かれているが、その右手に握られてる扇なども検校の「記号」であろう、やはり「誓願寺」図の翁も腰に扇を差しているのを見て取ることができ。

後続する「和泉式部」条との関係から、また本文にいう「遊行」の語から、やはり「誓願寺」条もその名所としてのたたずまいの内に雑遊芸世界の匂いのどこか漂っていることを、その絵図は表現していると解したのである。

ただし翁の被りものについて問題が残る。そのさまは検校頭巾からそのシコロを除いた体裁というべきだがいま未詳である。形状は菱烏帽子などに近いが『京童』には類例がない。諸絵巻に見えるところでは、幞頭を被る姿や頭巾姿のなかに似るものがあるが、何か決定的な事柄は見出しにくい。被りものについて議論の余地が残るので「誓願寺」図の翁を検校と断じにくい、そのような見るならば本文記述や前後の脈絡は得心がいくということではある。

【おわりに】

再びいうが、その本文は決して逸脱することなく「雅」に物語り、そして本文には記さない「俗」の事柄を挿絵の内にほのめかす、そのような雅と俗との微妙な相関のうちに各名所のたたずまいを描いていくという趣向を、『京童』という名所図会の価値として認めたいと思うのである。名所を単なる物見遊山の対象として平板化しない、そこに重層的な物語の構造を見て取り、それを本文と挿絵とで表現していく方法である。後の地誌類に比べれば個人的趣味的に偏る、あるいは稚拙の挿絵であるなどの評価はそれとして、各寺社・聖跡に伝えられる聖なる物語は、そのような趣味性、非定型性のうちによりやく命脈を保っていることがができるのではないだろうか。そのような趣味性のやがて失われた先に、物見遊山の対象として物語の「消費」が始まるのではないかと思っている。

〈注〉

(1) 本文、挿絵の引用については、近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従 古版地誌編一』（監修・横山重氏、解説・市古夏生氏、勉誠社、1976）に拠った。

(2) たとえば『日本古典文学大辞典』の「京童」項（矢野貫一氏執筆、岩波書店、1984）は複数の翻刻が整うことをいうが、「参考文献」については掲げない。『近世文学資

料類従 古版地誌編1』解題は、作者中川喜雲に関して松田修氏の詳しい研究(後掲)のあることを示す。

・1962 松田修「中川喜雲・人とその作品」(『文芸と思想』二十二号)

・1963 同 「中川喜雲・ある名所記作家の場合」

(『日本近世文学の成立、異端の系譜』(法政大学出版局)所収)

(3) 竹村俊則編『日本名所風俗図会七・京都の巻1』(角川書店、1979)は翻刻とともに語注、索引が付されておりありがたい。

(4) このあたり議論については次のような諸書を参看している。

・1981 宮本常一『絵巻物に見る日本庶民生活誌』(中公新書)

・1986 網野善彦『異形の王権』(平凡社イメージリーディング叢書)

・1986 黒田日出男『姿としぐさの中世史』(平凡社イメージリーディング叢書)

・1986 黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』(東京大学出版会)

・1986 保立道久『中世の愛と従属』(平凡社イメージリーディング叢書)

・1986 益田勝美『説話文学と絵巻』(三一書房)

・1989 黒田日出男『絵巻 子どもの登場』(河出書房新社)

・1990 黒田日出男、佐藤正英、古橋信孝『御伽草子』(ベリかん社)

・1990 五味文彦『中世のことばと絵』(中公新書)

・1990 徳田和夫『絵語りと物語り』(平凡社イメージリーディング叢書)

・1991 千野香織、西和夫『フィクションとしての絵画』(ベリかん社)

・1994 小沢弘、川嶋将生『上杉本洛中洛外図屏風を見る』(河出書房新社)

・1994 五味文彦『絵巻で読む中世』(ちくま新書)

・1995 藤原良章、五味文彦編『絵巻に中世を読む』(吉川弘文館)

・1995 若杉準治編『絵巻物の鑑賞基礎知識』(至文堂)

・1996 小泉和子、玉井哲雄、黒田日出男編『絵巻物の建築を読む』(東京大学出版会)

・1996 黒田日出男『歴史としての御伽草子』(ベリかん社)

・1996 黒田日出男『謎解き洛中洛外図』(岩波新書)

・1997 宗政五十緒編『都名所図会を読む』(東京堂出版)

・1998 阿部泰郎『湯屋の皇后』(名古屋大学出版会)

・1998 黒田日出男編『肖像画を読む』(角川書店)

・1998 五味文彦『春日験記絵と中世』(淡交社)

・1998 保立道久『物語の中世』(東京大学出版会)

・1998 宗政五十緒編『京の名所図会を読む』(東京堂出版)

- ・1998 若杉準治『絵巻を読み解く』（新潮社）
- ・1999 田中貴子、小松和彦他『百鬼夜行絵巻を読む』（ふくろうの本）

・1999 高畑勲『十二世紀のアニメーション』（徳間書店）

・1999 保立道久『中世の女の一生』（洋泉社）

- (5) これらの挿絵について、まず『都名所図会』以下、『拾遺都名所図会』『都林泉名勝図会』『花洛名勝図会』は前掲の『日本名所風俗図会』（角川書店）に拠った。また『芦分船』『住吉相生物語』『河内鑑名所記』『奈良名所八重桜』『洛陽名所集』『京童跡追』『出来齋京土産』は『近世文芸資料類従』に拠った。『堀川之水』は『新修京都叢書』（光彩社、1968）に拠った。

(6) 『塔のシンボリズム』が十八世紀半ば以降の名所案内図会類のいくつかに見られないとの事実は、その図像表現としての消長に関する問題を提起するが、そのような意識で名所案内図会類を網羅して調査したわけではなく、今はその用意がない。また『江戸名所記』（一六六二年刊）、『江戸雀』（一六七七年刊）、菱川師宣絵、『古郷帰之江戸咄』（二六八七年刊）など、『江戸名所』を取りあげたものに見られる塔図像はいずれも軸測投影に従うものばかりなので、『塔のシンボリズム』の消長を時間的にのみ論ずることはできない。

なお『洛陽名所集』にも『塔のシンボリズム』は見えない（巻四「清水寺」図、巻五「東福寺」図、巻六「八幡」図、巻十「仁和寺」図）が、その一方で軸測投影に従っ

て周囲全景のなかで違和感なく「写実」されている図像も見えている（巻三「黒谷」図、巻五「醍醐」図、巻九「北野」図、巻十一「東寺」図）のである。『洛陽名所集』が『京童』の興味本位とは趣を異にし、簡略ながらも所在地や現状を記し、古文獻・古歌をしきりに引くなど、実用的案内書・学術的地誌への道を開いた（『日本古典文学大辞典』項目記事）と評価されることを思うとき、これら「写実」に従う塔図像とはきたるべき学術的、実用的な地誌にこそ相応しい、現実的な感覚から求められた挿し絵であったということができるのかもしれない。

- (7) 図版は小松茂美編『日本絵巻大成8 年中行事絵巻』（中央公論社、1977）による。

(8) 吉田幸一「誓願寺縁起と和泉式部縁起」（『文学論藻』1966/5）などに詳しい。

(9) 図版は小松茂美編『日本絵巻大成18 石山寺縁起』（中央公論社、1978）による。

(10) 『七十一番職人歌合』は岩崎佳枝他『新日本古典文学大系61七十一番職人歌合 新撰狂歌集 古今夷曲集』（岩波書店、1993）によった。

(11) 1934 中山太郎『日本盲人史』（昭和書房、1976 八木書店より複製）

（群馬大学助教授）